

マラルメの未来の祝祭演劇について

(Offices を中心にして)

重光マリ子

序

マラルメは、1885年8月『ワグナー評論』に『リヒャルト・ワグナー、一フランス詩人の夢想』と題した記事を寄稿して以降、晩年、驚くべき集中力をもって演劇について書く。まず1886年11月から翌87年7月にかけて『独立評論』に時評『演劇についての覚書』を連載、これは1891年に刊行されたマラルメ初の散文集『バージュ』に『芝居鉛筆書き』の総題のもとに再編、収録されて、その中核をなす。そして1892年3月から翌93年7月までロンドンの新聞『ナショナル・オブザーヴァー』紙に都合11回フランス語で掲載された記事のうちの数篇。それから1893年に刊行されたマラルメの自選詩文集『詩と散文』の巻末に収められた『ディヴァガーションその2-祭式』、さらには1895年2月から『ルヴェ・ブランシュ』誌に『或る主題による変奏曲』の総題のもとに連載された論考のうちの数篇。これらの演劇についての論考・記事は、1897年1月に刊行されマラルメ生前の最後の出版となる散文集『ディヴァガーション』に再編されて収録される。

マラルメがこのように1885年以降意欲的に演劇論に取り組んだのは、ドイツの音楽家ワグナーのその祝祭的な楽劇にたいして、一フランス詩人として翹望する祝祭演劇のヴィジョンを打ち出す必要に駆られたからでもあろう。マラルメは現状の演劇への批判と、いくつかの現実の催し物をモデルとして考察することをとおして、未来の祝祭演劇のヴィジョンを模索、喚起しようとする。そのモデルの主なものとしては、コンサート、カトリックの典札、バレエ、メロドラマが挙げられよう。

本稿では、そうした論考の中でも極めて重要な作品であると思われる『ディヴァガーション』所収の Offices を中心にして、他のマラルメの演劇についての作品をも参照しながら、マラルメの未来の祝祭演劇のヴィジョンをいささかなりとも明らかにしえたらと思う。

なお、Offices は、Plaisir sacré、Catholicisme、De même の三章より成るが、それぞれの初出は次のとおりである。すなわち、Plaisir sacré は『ジュルナル』紙1893年12月5日号初出、Catholicisme は上述の『ルヴェ・ブランシュ』誌1895年4月1日号初出、そして De même はやはり上述の『ナショナル・オブザーヴァー』紙1892年5月7日号に Solemnité と題して掲載されたものが改

題されたものである。

内容的には、第一章と第三章とは、既に述べたようにマラルメが未来の祝祭演劇のモデルとするコンサートとカトリックの典礼とを、それぞれ分析したものである。第二章は、前半は宗教をめぐる形而上学的考察といえ、後半は、それを踏まえて、未来の祝祭演劇の条件を論述したものである。配列においてだけでなく内容的にも第二章を中心にして第一章と第三章とは対比している構造になっている。Offices という総題が示すように三章のテーマはいずれも《 office 》であって、ただマラルメに従って言うならば、それぞれ、コンサートは現代の、未来の祝祭演劇は未来の、そしてカトリックの典礼は元来の《 office 》であると言えよう。そしてこれらの《 offices 》に共通しているのは、音楽と群集の関係である。

1. 何故演劇か？

マラルメにとって演劇とは本来「崇高な本質のもの」であり《 Le théâtre est d'essence supérieure 》¹⁾、「祭祀」《 culte 》²⁾であり、「魂の遊戯の客体化」《 objectivité des jeux de l'âme 》³⁾、言い換えれば、「精神に内在する演劇」《 théâtre inhérent à l'esprit 》⁴⁾の表出である。

そして舞台とは、「神聖な場」《 lieu divin 》⁵⁾であり「我らが唯一の壮麗さ」《 Notre seule magnificence 》⁶⁾と言われる場である。また、詩《 poésie 》によって統括された諸芸術が一致して「何らかの宗教的あるいは公的・聖務的な性格」《 quelque caractère religieux ou officiel 》をそこに与えるべき場である⁷⁾。さらにまた、次のように言われる。

La scène est le foyer évident des plaisirs en commun, aussi et tout bien réfléchi, la majestueuse ouverture sur le mystère dont on est au monde pour envisager la grandeur, cela même que le citoyen qui en aura idée, fonde le droit de réclamer à un Etat comme compensation de l'amoindrissement social⁸⁾.

要するに、マラルメにとって演劇とは世俗的な娯楽の一つではなくて、人間の本質と深く関わった神聖な集団的営為である。

なお、マラルメが書物について、書物はあらゆる演劇に代わりうる⁹⁾と言いつつも、現実の舞台における演劇にこだわり続けたのは、演劇がまさに《 plaisirs en commun 》であるが故にであろう。書物が一般に孤独な喜びであるのに対して。

ところでマラルメは、こうした彼の理想とする祭祀であるべき演劇を、人々もまたそれと気付くことなく求めており、社会は必要としていると考える。

彼は人々のうちに日常では満たされ得ない幻想への飢えのごとき欲望を認める。

le trou magnifique ou l'attente qui, comme une faim, se creuse chaque soir, au moment où brille l'horizon, dans l'humanité — ouverture de gueule de la Chimère méconnue et frustrée à grand soin par l'arrangement social¹⁰⁾.

それは、マラルメによれば、社会の仕組によって軽視され、現状の多くの演劇がその「凡庸な要素」《éléments de médiocre》¹¹⁾で満たして貶めている欲望である。

彼は、宗教もまた人々の幻想への欲望にある意味で応えるもの、「諸幻想のうちの一つの通常受容」《acceptation courante d'une entre les Chimères》¹²⁾であるとするが、しかし、今や、国家的宗教であるカトリシズムは衰退しその典礼は形骸化しているのを見る¹³⁾。その一方、彼は、ワグナーの楽劇の反響やコンサートの最近の隆盛に、人々がそこで求めているのは宗教に代わるものであることを洞観する。例えばコンサートについて、次のように書いている。

Le mélomane quoique chez lui, s'efface, il ne s'agit d'esthétique, mais de religiosité¹⁴⁾.

そして、こうした宗教的なものへの渴望を、「非宗教性」《laïcité》という言葉葉を振りかざす時代の思想は見落としている、あるいは隠蔽しようとしていると批判する¹⁵⁾。

宗教的なものへの渴望は、要するに、絶対的なものへの渴望であると思われるが、マラルメは、我々は絶対的なものに対する時、普通の我々ではありえないと言い、人間における絶対的なもの（という幻想）の必要なことを暗示する。

cela improbable, en effet, que nous soyons, vis-à-vis de l'absolu, les messieurs qu'ordinairement nous paraissions¹⁶⁾.

しかし彼はまた、社会の非幻想化、平板化を認める。それ故に、彼は、先に引用した文の中でも言っているように、国家は、個人とのその関係から、我々の無意味さ、社会的矮小化に対して「壮麗さ（祝祭的演劇）」をもって償う義務があるとする。

L'Etat, en raison de sacrifices inexplicés et conséquemment relevant d'une foi, exigés de l'individu, ou notre insignifiance, doit un apparat¹⁷⁾.

それも、大衆が自らの判断力や知性についての意識を持つに至った現代、そうした

大衆の自覚に応じた祝祭的演劇でなければならない、しかし、そのための「新しい状況」も「舞台と客席とを一体化する精神的環境」も準備されなかったとマラルメは批判する。

l'ère est déchainé, légitimement vu qu'en la foule ou amplification ma-
jestueuse de chacun gît abscons le rêve! chez une multitude la conscien-
ce de sa judicature ou de l'intelligence suprême, sans préparer de cir-
constances neuves ni le milieu mental identifiant la scène et la sal-
le¹⁸⁾.

人々のうちに潜む幻想への欲求、宗教的なものへの渴望、絶対的なものへの憧憬、そして自らの判断力や知性についての大衆の自覚、— しかし、「未開拓の要素としてかくも我々を驚かし始めている群集、すなわち、我々自身」¹⁹⁾とマラルメ言うところの近代文化の一つの重要な要素である群集のそうした要請や意識に、もはや、あるいは未だよく応え得ていない現状の宗教、演劇、国家、— 新たなる時代の祝祭演劇が見出されなければならないとマラルメは提言する。

l'art dramatique de notre Temps, vaste, sublime, presque religieux, est
à trouver²⁰⁾.

それはマラルメが次のように述べているところの祭祀を何らかの形で顕在化するものであるだろう。

— Cérémonies d'un jour qui gît au sein, inconscient de la foule : pres-
que un Culte!²¹⁾

そして、そうした未来の祝祭演劇を見出し司る者は、マラルメによれば、誰よりも詩人であるに違いない。何故なら彼は、詩人は「凡庸さの波」《flux de banalité》²²⁾によって現実では劇場から追放されているが、舞台において本来他の諸芸術を統べるのは詩であり、劇場は本来「詩人の住まい」²³⁾であると考えるものであるから。

2. いかなる演劇か？

(1) コンサートを伴った上演

《Représentation avec concert》²⁴⁾「コンサートを伴った上演」—— とマラルメは未来の祝祭演劇について言う。

そして音楽の奇跡として、「神話（舞台で演じられている話）と客席との相互的浸

透」を挙げ、それによる空間への作用、すなわち舞台と客席との間の空虚な空間を満たす、したがって隔たりを無くすという作用について述べる。

Le miracle de la musique est cette pénétration, en réciprocité, du mythe et de la salle, par quoi se comble jusqu'à étinceler des arabesques et d'ors en tranchant l'arrêt à la boîte sonore, l'espace vacant, face à la scène : absence d'aucun, où s'écarte l'assistance et que ne franchit le personnage²⁵⁾.

この「神話と客席との相互的浸透」という音楽の奇跡は、後で見るように、音楽が人々の内面にまで作用しさらにはその身体にまで影響を及ぼすそのいわば魔術的な力によると思われるが、マラルメはそれに関して Plaisir sacré の中でコンサートにおける聴衆の反応を次のようにいささか皮肉に表して示している。

Voici des yeux, perdus, extatiquement, hors de leur curiosité! Non que refléter sur le visage une suavité innée ne suffise : à l'intérieur s'empreint un peu du sentiment même incompris à quoi l'on accorde ses traits²⁶⁾.

なお、マラルメが未来の祝祭演劇についてここで言う音楽とはオーケストラであることを、あらかじめ注意しておきたい。それはオーケストラの音響のその豊かさ、多様性、空間性などの故にであろうが、マラルメはそれを、同じく Plaisir sacré の中で、群衆の豊かな沈黙と対置させてオーケストラの集団的偉大さとして述べている。

elle(=la foule) confronte son riche mutisme à l'orchestre, où gît la collective grandeur²⁷⁾.

ところで、論が前後するようだが、「神話と客席との相互的浸透」とはどういうことなのだろうか。

L'orchestre flotte, remplit et l'action, en cours, ne s'isole étrangère et nous ne demeurons des témoins : mais, de chaque place, à travers les affres et l'éclat, tour à tour, sommes circulairement le héros — douloureux de n'atteindre à lui-même que par des orages de sons et d'émotions déplacés sur son geste ou notre afflux invisible. Personne n'est-il, selon le bruissant, diaphane rideau de symboles, de rythmes qu'il ouvre

sur sa statue, à tous²⁸⁾.

次は私の拙い解釈である。

空間を満たす音楽は、まさにそれ故に我々に具体的に作用を及ぼし得て、その結果我々には舞台上で起こっている事柄《 l' action, en cours 》は我々の身に直接起こっているもののように感じられ（信じられ）、主人公の体験は我々の体験となり（と信じられ）、その体験を悲喜こもごも通して《 à travers les affres et l'éclat, tour à tour 》我々は主人公である（と信じる）。そして今や主人公として内面を生きる我々は、我々自身、我々の内面の思いによって生きるように、舞台上の主人公もまた我々の内面の思いによって生きるものに思う（信じる）（舞台上の主人公への我々の心の目に見えぬ流入）《 notre afflux invisible 》——そしてまた実際我々がそのように思うこと、信じることによって、舞台上の主人公は主人公として存在し得るのであるが。 . . . —— ところで音楽は我々の内面に起こる思いをいわば先取りしたように表して、従って音楽によって《 par des orages de sons et d'émotions déplacés sur son geste 》仕草をする（存在する）主人公は、あたかもまさに我々の内面の思いによってそうする（存在する）ように思われる（信じられる）。こうして舞台上の主人公と客席の我々という主人公とは、相互的に循環的に《 circulairement 》に主人公であるということが生じる。

長々と書いたが、要するに、「神話と客席との相互的浸透」は、観客が舞台上の事柄を「自ずから信じること」《 être maîtresse de sa créance 》²⁹⁾にあると思われる。そして音楽はまさにそれをよく為し得るのである。

さて、そうして存在する主人公は、何者でもないものと言われる。

何者でもないもの、—— マラルメにとっては、反対に具体的登場人物、具体的な場所は、音楽を欠いた演劇の誤謬、すなわち、固定した舞台装置と現実的俳優とに関連した誤謬に他ならない。

Type sans dénomination préalable, Lui, quelque'un! ni cette scène, quelque part (l'erreur connexe, décor stable et acteur réel, du Théâtre manquant de la Musique) : est-ce qu'un fait spirituel, l'épanouissement de symboles ou leur préparation, nécessite endroit, pour s'y développer, autre que le fictif foyer de vision dardé par le regard d'une foule! Saint des Saints, mais mental³⁰⁾.

「群集の視線によって投げられたヴィジョンの虚構の源」³¹⁾ —— 一般には舞台がヴィジョンを観客に向けて放つ源であると考えられるのに対して、ヴィジョンの真

の源は群集である我々の内にあり³²⁾、それ故舞台は「ヴィジョンの虚構の源」であって、かつ舞台が舞台として成立するのは我々の視線によってに他ならない、と言うことであろうか。そして、「至聖所、しかし精神の」というのは、舞台は精神の最も聖なる活動の場であるべきだという考えによる言葉であろうか。

いずれにせよ、「精神の事象、象徴の開花、あるいは、その準備」がそこで展開されるためには、舞台は他ならぬそうした場であるべきで、また主人公は抽象的であるべきだという主張である。

そして、さらに、繰り返すようだが、音楽の必要であること。

l'acte scénique maintenant, vide et abstrait en soi, impersonnel, a besoin, pour s'ébranler avec vraisemblance, de l'emploi du vivifiant effluve qu'épand la Musique³³⁾.

では、何故マラルメはこうした抽象的演劇を理想とするのかといえ、それは演劇の基づくべきその神話ゆえにであるといえよう。

...que la Fable, vierge de tout, lieu, temps et personne sus, ...se dévoile empruntée au sens latent en le concours de tous, celle inscrite sur la page des Cieux et dont l'Histoire même n'est que l'interprétation, vaine, c'est-à-dire un Poème, l'Ode³⁴⁾.

さらに、また、次のような主張

Le Théâtre les (=les Mythes) appelle, non! pas de fixes, ni de sécuritaires et de notoires, mais un, dégagé de personnalité, car il compose notre aspect multiple³⁵⁾.

《Mythe》は、「天のページに記された神話」と言われる《Fable》に対して、それを映す「地上のページに記された神話」であろうか³⁶⁾。

いずれにせよ、演劇は、マラルメによれば、複数ではなく「一つの」神話（その普遍性ゆえに）³⁷⁾、「全てから、すなわち、既知の場所、時、人物から自由な」新たな神話を必要とする、何故ならその神話は「我々の多様な様相を構成する」からであり、「全ての人の参加のその潜在的な意味に基づいて明らかにされる」べきだからである。なお、「全ての人の参加のその潜在的な意味」については、マラルメが、《la Foule (où inclus le Génie)》³⁸⁾と言っていること、あるいは、《en la foule ...git abscons le rêve》³⁹⁾と言っていること、そして演劇を《culte》

と言い換えて、《 *culte qu'il faut l'autorité d'un dieu ou un acquiescement entier de foule pour installer selon le principe* 》⁴⁰⁾ と言っていることを挙げておきたい。これらの言説からも、それは次のようなことであろうか。すなわち、新たな神話は、全ての人のうちに共通して潜在している普遍的神話を反映するものだが、まさにそれ故に、それがそのようなものとして証明されるのは、全ての人の同意によってであるということであろうか。

「神話」—— 神について語るもの。そして、それを明らかにする演劇。—— そこにおいて結果として問題となるのは、神の現前である。

*L'amateur ... ne saurait plus assister, comme passant à la tragédie, ... ; et, tout de près, exige un fait — du moins la crédulité à ce fait au nom de résultats. (Présence réelle) : ou que le dieu soit là, diffus, total, mimé de loin par l'acteur effacé, par nous su tremblants, ...*⁴¹⁾

そして、マラルメにとって「神」とは「自己」に他ならない。

*sommairement il s'agit, la Divinité, qui jamais n'est que Soi, ... — au ras, de la reprendre, en tant que point de départ, humbles fondations de la cité, foi en chacun*⁴²⁾.

この「自己」という言葉でマラルメが示すところのものは、次のようなものであると言えようか。すなわち、それは自我の希薄化ののちにそれを越えたものとして、あるいは、その根源にあるものとして現れる人間の内なる絶対的、普遍的実在。しかし、見方を変えれば、観念《 *idée* 》、夢《 *rêve* 》、無《 *rien* 》、—— 信仰に基づくもの。(マラルメがその詩の行為をとおしておこなった作業の一つは、無を有とする価値転換ではなかっただろうか。)

それは、また、中世以来フランスにあっては主としてカトリシズムが担い現してきたとマラルメの考えるところの人類のその「当初の意志」《 *la volonté du début* 》⁴³⁾、すなわち、「絶対への意志」に対するマラルメによって提出された答えでもあると言えよう。

マラルメはこの「自己」に他ならない「神」が、既成宗教の衰退と時代の非宗教的傾向の中で、ぎりぎりのところで取り戻されなければならない、各自における信仰として、生活の基盤として、と言うのである。

そして、それを可能にするのが、マラルメによれば、既に見てきたような音楽を伴った抽象的演劇である。マラルメは、そこにおいて、「神話と客席との相互的浸透」を通して、人々は一致して共に「神」=「自己」との合一を果たす、すなわち、ここ

にオスチアという粗野な食事を逃れて、「コミュニオン」が成立すると考えるのである。マラルメが未来の祝祭演劇に最終的に求めるところのものは、この「コミュニオン」であり、「自己」を神格とする新たなる宗教の確立であると言えよう。

Notre communion ou part d'un à tous et de tous à un, ainsi, soustraite au mets barbare que désigne le sacrement — en la consécration de l'hostie, ...⁴⁴⁾

こうして、人々の要請に応える祭祀である演劇が、人々の全的同意に基づいて成立することとなる。

Mystère, autre que représentatif et que, je dirai, grec. Pièce, office. ... Ici, reconnaissez, désormais, dans le drame, la Passion, pour élargir l'acceptation canoniale ... avec le feu tournant d'hymnes, une assimilation humaine à la tétralogie de l'An⁴⁵⁾.

それは、マラルメによれば、《Mystère》（神秘劇：神秘）、《pièce》（戯曲）また《office》（聖務）と呼ばれるべきものであり、そして彼は、今後は教会法典による意味を拡大してドラマの中に《Passion》（受難：受苦：情熱）を、すなわち「一年の四部劇への人間の同化」、を認めるように要請するのである。

なお、一年の四部劇というのは、自然のスペクタクルである一年の四季に、マラルメによれば自己のスペクタクル《spectacle de Soi》⁴⁶⁾であるべき演劇を重ね合わせる言葉であろうと思われる。また、「賛歌のめぐる火」とは、太陽に重ね合わせる言葉であろうか。自然の演劇とは「一年」であり、そして一年は四季によって区切られるように、マラルメにとっては「自己の演劇」もまた同様に「一年」と考えられるものであり、そしてその一年は何らかの形で四季をもったものと考えられるのであろう。（マラルメは、四部構成の演劇を未来の祝祭演劇として考えていたのかも知れない。）

《Passion》—— 舞台上の主人公の《Passion》であると同時に、あの神話と客席との相互的浸透によって、何よりも観客である人々の《Passion》である。

(2) カトリックの典礼から

マラルメは、未来の祝祭演劇について、上で見てきたとはまた別の、カトリックの典例をモデルとするヴィジョンも、可能性として夢見たようである。そこで次に、カトリックの典礼について考察した *De même* を見ておきたい。

マラルメはカトリックの典礼のうちに、未来の祝祭演劇を取り入れるべき三つの要素を見出す。それは合唱の効果と司祭の仕様とオルガンの作用である。

まず、合唱についてだが、マラルメは次のように述べる。

quiconque y (= au nef) peut de la source la plus humble d'un gosier jeter aux voûtes le répons en latin incompris, mais exultant, participe entre tous et lui-même de la sublimité se reployant vers le chœur : car voici le miracle de chanter, on se projette, haut comme va le cri⁴⁷⁾.

内陣からの呼びかけに応じて、外陣にいる人々は歓喜に満ちて歌う。そのようにして歌うこと自体によって人々の心は高められるが、さらに、共に発せられた声が高く上ってゆくのを聞いて、人々の間には一体感が生まれるとともに、心は一層高まる。崇高さを帯びる程に。あたかもそこに崇高なるものが来たように。そしてそれは、人々の声か内陣の方へと収斂してゆくゆえに、内陣の方へと再び立ち返ってゆくかのようである。—— 上記のマラルメの言説は、このようには解釈できないだろうか。

いずれにせよ、ここで言われている内陣と外陣との関係における歌うことの奇跡は、既に見た舞台と客席との関係における音楽の奇跡よりも一層直接的であり具体的であるように思われる。

次に司祭については、次のように言われる。

quoique le prêtre céans n'ait qualité d'acteur, mais officie — désigne et recule la présence mythique avec qui on vient se confondre : loin de l'obstruer du même intermédiaire que le comédien, qui arrête la pensée à son combrant personnage⁴⁸⁾.

司祭は、俳優とは違って、登場人物という邪魔者によって人々の思考を妨げることなく、直接的に、神話的現存を示すという指摘である。ここには抽象的主人公という影さえない。

最後にオルガンについては、

l'orgue, relégué aux portes, il exprime le dehors, un balbutiement de ténèbres énorme, ou leur exclusion du refuge, avant de s'y déverser extasiées et pacifiées, l'approfondissant ainsi de l'univers entier et causant aux hôtes une plénitude de fierté et de sécurité⁴⁹⁾.

潜在性を奏でて⁵⁰⁾、その場に宇宙的な全体性と深みをもたらすというオルガンの作用が言われている。

マラルメはこれら三要素からなるカトリックの典礼を、未だどんな枠組によっても

越えられることのない「国家的宗教の演出」《 la mise en scène de la religion d'état 》⁵¹⁾であると賛嘆して、それは次の三重の作用によって現代の哲学的、芸術的願望を奇妙にも満たすと言う。すなわち、「典型（ここではキリスト）のその本質への直接的な招き」《 invitation directe à l'essence du type (ici le Christe) 》⁵²⁾、「典型が目には見えぬこと」《 invisibilité de celui-là 》⁵³⁾、そして最後に「（オルガン）の振動によって場が無限にまで拡大すること」《 élargissement du lieu par vibrations jusqu'à l'infini 》⁵⁴⁾である。

そして彼は、カトリックの典礼に見られる以上のような効果・作用とある意味・方向（自己を神格とする新たなる宗教という意味・方向か？）とを、我々の未来の祝祭のために、演劇において同化するという考えを述べるのである。

Une assimilation m'obsède, parmi le plaisir, d'effets extraordinaires retrouvés ici et de certain sens, pour nos fastes futures, attribuable peut-être au théâtre...⁵⁵⁾

しかし、マラルメは、この二つのものの同化による新たなる演劇の構想については、私の見るかぎりでは、他のどこでもこれ以上は何も言っていないようである。ただ、個々については、Solennité 中の「複数の声によるオード」という提言は⁵⁶⁾、合唱の効果を踏まえたものであると思われるし、同じく Solennité の中で次のように述べられている詩人の姿には、司祭の姿と重なるものがありはしないだろうか。

Seul venu à l'heure parce que l'heure est sans cesse aussi bien que jamais, à la façon d'un messenger, du geste il apporte le livre ou sur ses lèvres, avant que de s'effacer ; et celui qui retint l'éblouissement général, le multiplie chez tous, du fait de la communication⁵⁷⁾.

そしてオルガンについては、マラルメは、トロカテロ宮殿に、一つの未来のヴィジョンを見ている。

La première salle que possède la Foule, au Palais du Trocadéro, prématurée, mais intéressante avec sa scène réduite au plancher de l'estrade (tréteau et devant de chœur), son considérable buffet d'orgues et le public jubiliant d'être là, indéniablement en édifice voué aux fêtes, implique une vision d'avenir⁵⁸⁾.

結語

マラルメの未来の祝祭演劇のヴィジョンは、少なくとも Offices に関する限りは、いかに音楽は群集に作用してコミュニオンを成立させようものであるかという点に重点が置かれているようである。では、音楽の富を文学に取り戻すことを慫慂した詩人であるマラルメにとって、演劇における詩句あるいは言語表現はいかにあるべきなのだろうか。それについてはおそらく、マラルメの次の言葉がその一つの答えとなるものであるだろう。

Pas que l'un ou l'autre élément (=la Musique ou le Vers) ne s'écarte, avec avantage, vers une intégrité à part triomphant, en tant que concert muet s'il n'articule et le poème, énonciateur : de leurs communauté et retrempe, éclaire l'instrumentation jusqu'à l'évidence sous le voile, comme l'élocution descend au soir des sonorités⁵⁹⁾.

ところで、以上見てきたようなマラルメの未来の祝祭演劇は、文字通り未来のものとして、すなわち実現されることなく夢に留まったものである。しかしそれは、マラルメが夢であることを好しとしたということではなくて、時代の演劇の現状から未来に夢を託すことに甘んじたということであるだろう。マラルメは、かつて、『半獣神の午後』の舞台化を断られたこともある。マラルメの目には、時代は、演劇においても、「空位時代」⁶⁰⁾と映っていたようである。

では、マラルメの未来の祝祭演劇のヴィジョンは、フランスの、あるいは、ヨーロッパの演劇史の中でどのように位置付けられるものなのかという疑問が生まれてくるのだが、それについては今後の課題とさせていただきますと思う。

注

Stéphane MALLARME : Igitur, Divagation, Un coup de dés, préface d'Yves BONNE-FOY, collection Poésie, Gallimard を, C.P. と略記する。

- 1) Le genre ou des modernes, C.P., p.204
- 2) Ibid.
- 3) Ibid.
- 4) Planches et feuillets, C.P., p.227
- 5) Le genre ou des modernes, C.P., p.206
- 6) Ibid.
- 7) Ibid.
- 8) Ibid., C.P., p.207
- 9) Solennité, C.P., p.235, なお, 書物と演劇との相違点に関しては, Jacques SCHE-
RER : Le "livre" de Mallarmé, Gallimard, p.43 参照。
- 10) Crayonné au théâtre, C.P., p.178
- 11) Ibid.
- 12) Catholicisme, C.P., p.287
- 13) Ibid., 段落(1)～(5) C.P., p.285
- 14) Plaisir sacré, C.P., p.282
- 15) Catholicisme, 段落(11) C.P., p.287, De même 段落(6) C.P., p.294
- 16) De même, C.P., p.291
- 17) Ibid., なお, 社会の非幻想化についても, 同ページ, De même, 段落(1)に, 例
えば次のような一文がある。
《 Quelque royauté environée de prestige militaire, suffisant naguères
publiquement, a cessé. 》
- 18) Crayonné au théâtre, C.P., p.184
c.f. 《 un esprit, réfugié au nombre de plusieurs feuillets, défie la civi-
lisation négligeant de construire à son rêve, afin qu'elles aient lieu, la
Salle prodigieuse et la Scène. 》 Solennité, C.P., p.236
- 19) Plaisir sacré, C.P., p.284
- 20) Stéphane MALLARME, Oeuvres complètes, Bibliothèque de la Pléiade, Galli-
mard, p.717
- 21) Richard Wagner, C.P., p.168
- 22) Ibid.
- 23) Le genre ou des modernes, 段落(4), C.P., p.205
- 24) Catholicisme, C.P., p.288

- 2 5) Ibid., なお, 「アラベスクと黄金」は, 音楽と神話とによって観客の心のうちに喚起される心象を表しているのではないかと思う。
cf. 《... , comparer les aspects et leur nombre tel qu'il frôle notre négligence : y éveillant, pour décor, l'ambiguïté de quelques figures belles, aux intersections. La totale arabesque, qui les relie, a de vertigineuses sautes en un effroi que reconnue ; et d'anxieux accords.》 La Musique et les Lettres, C.P., p. 357
- 2 6) Plaisir sacré, C.P., p. 283
- 2 7) Ibid., C.P., p. 284
- 2 8) Ibid., C.P., p. 288
c.f. 《 un auditoire éprouvera cette impression que, si l'orchestre cessait de déverser son influence, le mime resterait, aussitôt, statue.》 Richard Wagner, C.P., p. 171
- 2 9) Richard Wagner, C.P., p. 170
- 3 0) Ibid., C.P., p. 174
- 3 1) c.f. 《 La scène est le foyer évident des plaisirs en commun,》 Le genre ou des modernes, C.P., p. 207
- 3 2) c.f. 《 ce spirituellement et magnifiquement illuminé fond d'extase, c'est bien le pur de nous-mêmes par nous porté, toujours, prêt à jaillir à l'occasion qui dans l'existence ou hors l'art fait toujours défaut.》 Solennité C.P., p. 236
- 3 3) Richard Wagner, C.P., p. 171
- 3 4) Ibid., C.P., p. 174
- 3 5) Ibid.
- 3 6) Le livre, instrument spirituel 中の絶対の書物についての次の件が想起される。
《 l'hymne, harmonie et joie, comme pur ensemble groupé dans quelque circonstance fulgurante, des relations entre tout. L'homme chargé de voir divinement, en raison que le lien, à volonté, limpide, n'a d'expression qu'au parallélisme, devant son regard, de feuillets. 》 C.P., p. 267
- 3 7) Crise de Vers 中の絶対の書物についての次の件が想起される。
《 — que, plus ou moins, tous les livres, contiennent la fusion de quelques redites comptées : même il n'en serait qu'un — au monde, sa loi — bible comme la simulent des nations.》 C.P., p. 250
- 3 8) Le mystère dans les lettres, C.P., p. 274
- 3 9) Crayonné au théâtre, C.P., p. 184
- 4 0) Le genre ou des modernes, C.P., p. 204
- 4 1) Catholicisme, C.P., 289 ~ p. 290

- 4 2) Ibid., C.P., p.286
- 4 3) Ibid., C.P., p.285, なお, Catholicisme 段落(4)(5)(10)を参照されたい。
- 4 4) Ibid., C.P., p.289,
c. f. Haskell M. BLOCK : Mallarmé And The Symboliste Drama, Greenwood Press Publishers, p.85 《The magic and mystery of the theater reside within its very substance, as an evocation of the absolute, embracing the destiny of all humanity. In this sense, Mallarmé's ritual drama is the means of the propagation of a new religion, a secularization of the liturgy and rite of ancient dramatic performances.》
- 4 5) Ibid., 《Mystère》という語は, マラルメにおいては重要かつ広い意味を持つ語であり, ここでも一義的にはとれないように思う。《Passion》という語も多義的に使用されているようである。《pièce》という語では, 戯曲の上演であるような演劇ではなく, それ自身が戯曲であるような本源的な演劇が意味されているのではないかと思う。
- 4 6) Quant au livre, C.P., p.255
- 4 7) De même, C.P., p.293
- 4 8) Ibid.
- 4 9) Ibid.
- 5 0) おなじく De même の中に, オルガンについての次のような記述がある。
《un instrument unique, jouant la virtualité》 C.P., p.292
- 5 1) Ibid., C.P., 293
- 5 2) Ibid.
- 5 3) Ibid.
- 5 4) Ibid.
- 5 5) Ibid., C.P., p.292
- 5 6) C.P., p.237, 《à soi fondant ce que ces deux (= le théâtre et la musique) isolent de vague et de brutal, l'Ode, dramatisée ou coupée savamment ; ces scènes héroïques une ode à plusieurs voix.》
- 5 7) C.P., p.236
- 5 8) De même, C.P., p.293
- 5 9) Crise de vers, C.P., p.246
- 6 0) 《Au cours de la façon d'interrègne pour l'Art, ce souverain, où s'attarde notre époque ...》Le genre ou des modernes, C.P., p.206